

The Romans of Partenay における 代名詞主語の省略について

大 島 巖

I はじめに

この作品の原形はフランスに伝わる Melusine 伝説で、それが広く一般に知られるようになったのは、1387年 Charles V の弟 Duk de Beri がその秘書 Jean d'Arras に命じて、自分の妹 Duchesse de Beri の慰めのために、この Romance を書かせた時に始まる。彼は Lusignen 城に保存されていた document に記録されていた妖精 Melusine の有名な行状をその主要部分に取り、自分の創作をも若干加えて、最初はラテン語で、つづいてフランス語で romance を完成させたのである。これはヨーロッパ各地に拡がり、種々の edition を生み、人々の間に親しまれ、やがて *A Chronicle of Melusine* として prose romance の形で英語にも訳され、その copy の一部は British Museum に保存されていて、後に述べる La Coudrette の版の different version をなしているのである。

更に、15世紀の始め、一般に流布していた3種の text を参照し、その中の素材を re-arrange して、octosyllabic metre から成る詩の形で Melusine の romance が書かれた。これは Partenay の領主 William の命を受けた Poitevin の住人 La Coudrette の手になるものであるが、1401年この領主が死んだ後も、息子 John of Partenay の要求によって、versification の仕事は続けられ、当時フランス国内で起きた事や、領主 John に対する讃辞なども

追加して、作品を完成させた。

しかし *Melusine* の物語の詩形化を試みたのは *La Coudrette* が最初ではなく、彼の前にも二三の者が試みていたようである。また彼の独創性がこの作品中で発揮されているわけではなく、ただ物語を *retold* したに過ぎず、うまく行かないと途中で *narrative* を中止したり、飛ばしたりし、どちらかと言えばどこちない作品を書き上げたと言われているが⁽¹⁾、それでもその MS. は理解し易く、後から述べる英語訳の *Partenay* と比較した場合明瞭な表現が用いられていて、極めて *poetical* なものであると言われている。

II 英語訳 *The Romans of Partenay* の特徴

ここに取り上げた英語訳の *The Romans of Partenay*⁽²⁾ は Skeat によると、*La Coudrette* の text からの翻訳で、約6600行の line から成る *rime royal* の詩である。成立は15世紀の後半の頃と考えられているが、作者については全く不明で、この作品が *Midland* 地方の方言で書かれていることにより、*East Anglian* の手になるものと推定されているに過ぎない。MS. は *Cambridge* の *Trinity College* に保存されているものが種類しかないと信じられ、*fol. 1* と *fol. 88* が欠けている以外は完全である。この copy は *original* なもの（殆んどありえない事であるが）であるかも知れず、さもなくとも、専門の *scribe* の手によらず、*translator* 自身が書き下したものではないかと推定されている。

ところがこの作品に用いられている英語は極めて特徴あるもので、普通の文法から逸脱した箇所が多いと言われている。Skeat は訳者の用いたフランス語の text は、多少 *reading* の異なる部分もあるが、この作品とよく似たものであったに違いないと述べ、更にフランス語の text を絶えず参照することによって、理解しにくい文章や語句の多くを解決することができたし、困難であった *punctuation* を決定する事ができたと評しているほどである⁽³⁾。

作品の中には、さまざまな誤訳や文法上の誤りや *story* の取り違えなどが散見されるが⁽⁴⁾、これらのことを考慮外においてさえ、人目を引く文体的特徴と

して、次のようなものが挙げられよう。

1. 直説法現在および過去を表わす定形動詞として、現在分詞が用いられる。

But musing ful fast and was ryght penssife
As euer was man which that here bare life. 363-364

Thai sayng hym with contenance good and fin,
That gladly wold do hys plesire eche wyght. 1473-74

2. 極端とまで言いたいほどの代名詞主語の省略が行われる。

Put hys feet before, noght drad, in went tho,
Shittyng vp hys mouth with hys teeth also. 4477-78

In what maner forme gouerne the now shall? 2167

3. *be* 動詞がしばしば省略される。

I not aqueynted of birth naturall
With frensche his verray trew partightnesse, ... p 8-9

Alway in slepe this cursed cruell fend. 5783

With hym ladyes and damycelles fair, ... 6021

の3点を挙げる事ができよう。今回はこのうち最も顕著な文体上の特徴となっている代名詞主語の省略に問題をしばって、それを分類し、分析して行きたいと思う。

III 代名詞主語の省略

代名詞主語の省略は Teutonic Languages の先史時代にまで、さかのぼることができ、その時代においては丁度 Greek や Latin などのように、動詞の inflexion が3つの人称を表わすのに十分であった。英語も OE や ME の時期にあっては、主語が先行する文か節や、あるいはその他の文脈によって容易に補い得る時は、代名詞主語はしばしば省略された。しかしこの現象は ME の後期には次第に少なくなって行き、大体15世紀の始め頃までには姿を消して

行った⁽⁵⁾。

特に3人称の単数と複数の代名詞主語の省略は、この時期においてはごく普通のことと、しばしば行われたと言われている。これに対し1人称と命令文を除く2人称主語の省略は普通ではなかったようである。この現象は作家間において大変異なった様相を呈するが、散文よりも韻文に多く現われ、概してあらゆる type の文学作品に起っているようで、フランス語の影響であると言われるが、確証はないようである。3人称の代名詞主語がよく省略される事実について、Mustanoja は主語と述語動詞の結合の度合いが1人称や2人称の場合よりも3人称の場合の方が somehow less close であることによるとの説明を与えている⁽⁶⁾。

一般に省略とは、文として完全な形態を整える上には必要であるが、意味上これを欠いても支障のない場合の短縮であり、文脈、経験、一般的知識などによって、読者が直ちにしかも容易に補い得るものでなければならぬ⁽⁷⁾。したがって代名詞主語が省略されるためには、主語が前の文のどこかに現われているか、さもなくば現在話題にのぼっているなどして context からそれが理解され、潜在的に読者の頭の中に入っていることが前提とされているわけである⁽⁸⁾。

代名詞主語の省略については従来から諸家の間でいろいろと分類され、分析が試みられて来ているが、今その分析結果をこの作品に当てはめてみると、種々の疑問が生ずるのである⁽⁹⁾。

第1にこの作品は15世紀の終り頃に書かれたと推定されるに於ては、代名詞主語の省略が多すぎはしないだろうか。

第2に省略される代名詞主語は3人称のそれが圧倒的に多いのであるが、それでも、1人称や2人称(命令文を除く)の代名詞主語もかなり省略されているのはどうしてであろうか。

第3に代名詞主語の省略について、従来からなされて来た説明によって、この作品におけるすべての場合がつくされうるであろうか。

以下これらの点に焦点を合わせ、この作品中に現われた代名詞主語の省略に

ついて、すべての事例を抜き出し、これを分類し分析した結果をまとめてみたいと思う⁽¹⁰⁾。

1. その文中⁽¹¹⁾には主語は全く表示されていないか、あっても別の主語が現われていて、問題の文の主語は文脈のみから判断しなければならない場合。この場合は予想される主語は3人称である事が多いようである。

To poiters toke way, And⁽¹²⁾ ther told and spake,
Thys said Erle vnto, al the gret meruail,
Whych neuer ne saw such like apparail. 740-742

The spere lete doñ, ren the hed , be-forn lete goo;
After ny sewed, derkly, As man blynd. 4475-76

For sorow And wo An-hy hys hand gan hold,
Gaffray forthwith smote vppon the hed an-hy;
Off that greuou stroke Gaffray greued sore. 4298-00

Tho cerched, enquered, And went Aboute,
Till the keys Founde with-out any doute. 4743-44

2. 二つの等位節から成る文において、双方の主語が同一ならば、2番目の節の代名詞主語は省略されうる。

Now our sorow ye haue vnto an ende dight,
And Als put to end the fary work ryght. 4792-93

Thys full noble kyng of Arminiens
In his days was man of grett goodnesse,
But Ay myght not be in liffes existence; 1604-06

And I beleue ye will it sore aby
iff he you se, for strong is of person; 4679-80

また2つの主節の間に挿入された3番目の節またはそれ以上の節によって、上記の2つの等位節が分離される時でも、2番目の主節の主語は省略されうる。

But she uoided thens er that it gan fall,

- And uanished Away fro ther sightes all. 5639-40
 The wayes And pathes so rode thay aboute
 That thay approched Columbere toun al-oute,
 And ouer that went ryding the contre,
 Hilles, wodes passyd, the roche might se; 865-868
 Full uaillant and wurthy were thys men tho,
 Which noght ne went to sompnolent sleping,
 But myghtyly And pusantly were waking,
 And the giftes all therof bare Away. 5507-10

なお、この場合2つの等位節の間の接続詞が省略されているが、2番目の主節の代名詞主語は省略される。

- Ther with serpentes he deuoured was,
 Nawher ny went vp As other gan doo. 6000-01
 Raymounde vnderstode, ther hir gan behold,
 Sore astoned was times manyfold,
 When that he saw she hym held by rayne. 377-379
 I hym lost when in-to woode gan draw
 Neuer after perceiued hym ne saw.” 608-609
 humbly vriens salute thys souerain,
 Thys kyng which in body this poison hent;
 Anon hys saluz yild forthwith ther present, ... 1431-1433

またこの作品の特徴として、最初の節中に主語が表わされないで、後の方の節中に主語が表示されているものもある。

- Off Gaffray with gret toth leue shall now present,
 And return I shall to Raymounde fully, ... 2865-66
 For in hym was had huge hardesse surely,
 For moche had doñ of manly dedes fair,
 But nomore shall do thys knyght debonair. 5948-50
 Fro partenay to Rochell the lande shall iustice,

An inly good knight shall he be and wyse. 3807-08

3. 主節と従属節において、それぞれの主語が同一である時、主節または従属節のいずれか一方の主語が省略されうる。

主節の方の主語が省略されているもの。

But to my power what I can wil doo: p 163

When dined thay had, ther handes wash clenly; 1846

When he redy was, taried ne reste; 5021

And yf ye of your fader luste enquere,
At mont-sarrat finde shall þat man of fame, ... 5248-49

従属節中の主語が省略されているもの。

here-beforn I haue you be promysing
That of this contre make you wold A kyng. 2407-08

For I shal neuer hold the company,
To whome haue hert peteuous and tender ay; 3649-50

Iff thys poyntement hold noght in thys deuise,
ye shall me lese, be therof certane, ... 505-506

Raymounde Answerd, As not wold condissend,
“To-morne shall hir se, ...” 2748-49

4. 主節の主語と従属節の主語が異なっている時でさえ、その内のいずれか一方の主語が省略されうる場合がある。

主節の方の主語が省略されているもの。

Iff that he be there, truly shall hym fynd. 4474

Tournyng enuyron, the hole perceyuinge,
Auised and knew, well gan it to note
That thys huge Geant ther had made entring. 4447-49

A noble thyng was to behold and se
To-Brehaignè-ward forth faste were passyng,

Which gret nede had to socour and surete, ... 2150-52
 従属節中の主語が省略されているもの。

What wold ye shold say? fresh was enuiron. 929

Cf. Que voulez vous que Ie vous compte?

But the hour coursed that born was worly
 or that wrenched lyf so long leuyng hold. 304-305

The pope assoiled hym ther benyngly,
 When declared hade hys dedes vnperfight. 5224-25

また主節の主語と従属節の主語が、それぞれ同一であろうと、異なっていようと、その両方共の節に主語が省略されている場合もある⁽¹³⁾。

But that oth most hold which first day me made. 1030

When thes nouels hurde, ioyous therof were; 4740

After thaim told, when fiftene yeres gan owe,
 The maner how I loste ther fader fre. 4546-47

Firmely commaunding hym shold there abide,
 Noght Fro horsebakke go till he cam, no tide. 5837-38

これら3, 4項の複文において、主節と従属節の位置と、各々の節の主語の省略との関係を調べてみると下の表のようになる。

この表の中の「主語は表わされている」を「(代)名詞主語が現われる」更に「主語は省略されている」を「代名詞主語が現われる」と読みかえて、ModEにおける複文のそれぞれの節の主語の現われ方と比較してみると興味深いものがある。

主 節	+	従 属 節	
I型 (主語は表わされている)		(主語は省略されている)	110例
II型 (主語は省略されている)		(主語は表わされている)	47例
	+	主 節	
III型 (主語は省略されている)		(主語は表わされている)	26例

IV型（主語は表わされている） （主語は省略されている） 36例

ModE の複文において、先行する主節中に代名詞主語が、それに続く従属節中に名詞主語が現われる構文は存在しない。この作品中にあって、このII型の構文はその主語は直ちに判断できず、ある程度読み進んでからでないとその意味が理解され得ない場合も起る。第2項で挙げた2つの等位節において、後の方の節中に主語が現われて、最初の方の節中に主語が表わされない文と同様、この作品における文体的特徴を示すものとして注目されるものの一つに数えられよう⁽¹⁴⁾。この型の構文を取る例を更に下に示す。

Ther A gret oth made As man inly bold,
 Afor thaim present to all openly,
 That he wold be dede ful recreantly
 Or discomfite wold this cruell Geant; 4434-37

Such A word shal say, repent can not purchas;
 Neuer shall ne may, vnto þat he dy,
 Conquere that he shall And moste lesse ther-by. 3540-42

Vnto hys brother the lande toke goodly,
 Sayng he moste go withoute any reste,
 Off that riche tresour for to make conqueste. 6053-55

The Abbay and mynstre fourge and make most, lo!
 Which fair place ye haue distroid and shend. 4987-88

Anon into A schapel made entre,
 Which thaim ny vnto ful redy ther found,
 knyghtes, ladies, And gentile wemmen fre, ... 771-773

In thys estate rode lamentabillye,
 Tyll he Approched, certes, sodenlye
 The fontayn and well of thursty gladnesse, ... 321-323

...More nerre wold approche noght this said montain,
 Ne lenger with you be here sogernyng,

Sin to you haue I shewed here certain
Grimold the Geant most meruelous plain. 4111-14

Fourged and made was in A somer tide
More fairer then euer it was before, ... 5111-12

5. 予備の *it* を取りうる非人称構文において、予備の *it* を省略するのは ME では普通である。

Ful ofte hath bene said that at that fontain,
Many merueles have sain ben A day, ... 751-752

Ful hiduous was to behold adon ; 1116

Full good is that ye ther-of discharge yowe ; 74

Ouer long wold be to declare and tell,
Ther wurthy dedes vnto say or spell. 5102-03

here you shal declare by fortune hou gan fal. 4878

また非人称動詞が与格を取る時も *it* は省略しうる。

you behouith to trauel and haue pain
So that peple ye moste bryng redy, ... 800-801

...if you please to take the paine & pine
To beseke our lord, vs conuey and bring
Aboue unto the ioy euerlasting. 6515-17

I haue wonnen that nedith you thys houre,
Acquired haue ye worship and honoure. 2323-24

また予備の *it* を取りうる非人称構文が接続詞 *as* の後において、その予備の *it* を省略することがある⁽¹⁵⁾。

In hermeny the gret is it uerily,
As in this history told is and hade. 5372-73

To thys lady went, cryng hir mercy,
lyke-wyse As was said by Anthony fre. 1900-01

The Erle said, “Raymound, thys path wyl vs bryng nye,
As me semeth, to peyters the ryght way; 173-174

接続詞 as の後で主語が省略されうるのは、非人称構文の場合ばかりとは限らない⁽¹⁶⁾。この場合の as の解釈のしかたには、いろいろな問題があり諸家の間に一致した見解はないようであるが、ここでは一応接続詞として、その後で代名詞主語が省略されたものと考えておきたい⁽¹⁷⁾。

Enuiron the skyn rounde Aboute cut all
As narew as may perceyue it to se, ... 570-571

That Raymounde loste the fair melusine, lo!
As at other days don had alway, ... 2725-26

Which causid a fal fro hys Astat hy
To hys gret repref, ryght to shamfully,
As after wyl make declaracyon,
Of al ther warkis the conclusyon. 1257-60

6. 先行する斜格の名詞または代名詞によって、主語が判断されうる場合において、その代名詞主語は省略されうる。

Full moche the Geant was Astoned tho,
When off hys Armes on had loste of-new;
haused his swerd, trowing Gaffray smitte to;
But the stroke uoided And somwat withdraw,
A litell blenched enmyddes the medew,
Vppon his legge smote with swerde wonderly,
A meruelous stroke gaffe, Ato carf hys thy. 3081-87

Anon after had she born in certain
The fourth sone, callyd and named Antony,
But in hys iaw bare A hurt ful of pain
Off A lyon, Which al hys life bare ful sighty; 1226-29

Euery man shold doubt hir cruell hand,
For ouer-gret stroke yeuith with hir wand;

Firmely and stedfastly redoubted shold be. 6166-68

hys langage greuyd moche Raynold that day,
 With spores smote faste his courser bigly,
 With hand strained his brande of stile fersly,
 And wightly went to smite the kyng Craquo,
 By such fors And strenght hed rent teth vnto. 2257-61

Fro hys coursere doñ Anon ther leping,
 A-foote discended, in-warde gan behold. 4450-51

またこのような斜格の名詞または代名詞が、述語動詞よりも、後に現われている場合においても、その代名詞主語は省略される場合がある。この現象はこの作品の文体的特徴を表わすものの一つとして注目するに値しよう。

Forth-with declarid to hys peple all,
 And to thys Cite his peple gan cal, ... 1306-07

After me made by thy will and uolente
 To take this woman of the Fayry, ... 3473-74

Full wightly tho releued hym sertain,
 In hys hert gan fele full dolorous woo. 4226-27

More had ne toke at that entreuall,
 Ther unto our lord commaunded hys men all; 5165-66

この種の省略は直接話法の被伝達文中に多く現われる傾向にあるようだが、後にも述べるように、直接話法においては状況が限定されるため、主語が省略されても、それほど ambiguity は生じないためでもあろう。

Fromont Anon Answered that stounde,
 “yff it please our lord, my power do shall.” 2651-52

Gaffray Answerd to thys baculere,
 “My name wil not hide by ryght non engine; 4243-44

Vnto tham he sayd, “reste wil noght to tell;
 Full ill me is come, hard nouvelles and sad; 1948-49

self-pronoun およびそれに準ずる人称代名詞によって主語が判断される場合、その代名詞主語は省略されうる。

Then to hym-selfe said; “fair god lord an hy,
What may me become or what do shall I?” 3331-32

In what maner forme gouerne the now shall? 2167

hym-selfe tormented and cursid ful sore, ... 317

7. 集会的、総称的なものを表わす名詞や、不定なものを表わす代名詞から主語が判断される場合は、その代名詞主語は省略されうる。

Neuer wurse man sain, truly to rehers,
For meruelous was in dedes diuers. 4157-58

So orgulous sette, full of cruelte,
Gret uengauce gan do to the comynte;
As cursedly sly A thousand As on,
The strengest mortal eschew wold hys person. 4071-74

また異なった数または人称を表わす語から主語が判断される場合も、その代名詞主語は省略されうる。例えば、単数主語を有する文が2つ以上続き、その後それらの主語を一括して受ける複数主語が予想される箇所では、その代名詞主語が省略されると言った場合である。

Raymounde laughed tho, hym preising faste there.
Melusine without othir taryng
Made right good chere vnto the messinger;
When hym chered had with all maner thyng,
A ryche gifte hym gaffe: 3130-34

Thys noble kyng was full Amerous ay;
Couenaunt me had, er spoused were Alway. 4526-27

Thys good man before, after went this king,
Ascending vp hy ther the greës all,
Fro the hall went more hyer in going. 5433-35

8. 不定動作主を予想させる別の表現によって、主語が判断されるときは、一般人称を表わす代名詞主語は省略されうる。

In many contres know the name of myne; 4246

And in sompnolence be founde thyng any,
Ther finabilly For euer ther shall dwell,
With thys fair lady ther fortake ueryly, ... 5384-86

9. 2人称に対する命令文では、主語が表示されている場合よりも、主語が省略されている場合の方がより一般的である。

Se ye here now thre in your hie presence,
Do as liketh your noble reuerence. 83-84

Go thys day, brother, And know it veryly;
Putteth payn to haue off it knowleching; 2772-73

10. 回数は少ないが、命令文に続く名詞節中において、2人称の代名詞主語は省略されうる。

To god and his sayntes me swere now thys braid,
That in mariage me wil be taking, ... 486-487

Knowith thys, to you shall come greuouse pine,
Ne neuer goodnesse shal resceiue certain; 3634-35

11. 語り物文学という性格上、同じ内容の事柄を、別の語を用いたり、別の構文を用いたりして、くり返すことが多いが、このくり返しの節中において代名詞主語は改めて表わされないで、省略される場合がある。

The walles hie deuised she echon,
Wel founded was vppon the said uayley; 1128-29

All-way thy dedes shall go to decline,
Ne neuer shal be wrought ne made again, ... 3636-37

Vnder A tre sate this Geant in strange wise;
On a marbre stone at that ceason satte; 4100-01

また主語が後半の節中に表わされているものもある。

There declarid his lord honourable,
 “My lord,” said Raymound with contenance stable, ...

816-817

12. 物語の語り手である代名詞主語 “I” は省略されうる。これは ModE の日記の文とも対比され興味を引くものがある。

No more of Raymound, but passe forth and goñ,
 Off the Barons hy say shall of contre. 3948-49

Fro thaim to ther fader torn wyll by grace, ... 1664

...Of whom anon shal you declare and say
 Where hym cam tho gret mischef and afray; 139-140

Therof preise and thanke the hy Trinite,
 By whom thys dite fourged haue and made. 6412-13

物語を進行させる上で、語り手が登場人物を紹介し、新しい話を導入し展開して行く箇所が随所にあるが、その部分においてすら、語り手の “I”，または次の文中において話題の中心人物となる登場人物を表わす主語を省略する場合が若干ある。これもこの作品の文体の特徴を表わすものといえよう⁽¹⁸⁾。

Now retorn Again vnto vriens,
 Which of tham was the most auncion.
 Eche shal declare by ordres diligens,
 That men may perceiue dul am not ther-on.
 vriens was A fair squier of person, ... 1275-79

As to our purpos here will I repair,
 Touching our nouel new enheritour,
 Off noble pertenay Iohañ the lorde hair,
 Off whom spokying haue here in langage our.
 A worthy man was and of gret honour, ... 6231-35

Retorñ shall Again to fair Palestine,

Which to that place destened by Presine ;
 In the hy montain Aboue-said þe site,
 Where many A cruell serpent enhabite. 5723-26

No more of Raymound, but passe forth and goñ,
 Off the Barons hy say shall of contre.
 Full sensible were, inly wyse and sage,
 Orrible toke by on Assent and gre, ... 3948-51

13. 回数は極めて少ないが、物語の聞き手を表わす代名詞主語 *ye* の省略されている場合もある。

As is tyme shal hire the mater and cas. 1069

As the history seith to euey man
 Off whom after shal do make memory. 1144-45

...wherthorough he lost
 Presine hys lady, As after shall hyre ; 4404-05

14. 直接話法において、伝達動詞の代名詞主語が省略されることがある。この場合は被伝達文の内容、および大半の場合に見受けられる被伝達文中の代名詞主語によって、伝達動詞の主語は推測されうる。

“Fayre swet lade,” said, “I you plegge trouth myne, ...” 1049

“lord, wat shal I doo, lord?” said, “lete me dy !” 2891

Then vnto hym said, “no nerre will I go ; 5826

To hys peple said, “vnto hors ye goo ;
 I shall nothyng spare ualey ne montain, ... 3243-44

“Hyt nedith noght,” said, “more haue pensifnesse,
 I know well that ye by no mene this day
 your moder recouer certes ye ne may. 4982-84

“By reson,” said “he shuld do conquere
 All landes with hys semblant and chere ; 1420-21

間接話法における唯一の用例として、

Thys monstre to destroy said he wold go,
With-all the tresour conquere and oute breke. 6043-44

また被伝達文中において、話し手を表わす代名詞主語が省略されている場合は、伝達動詞の前に主語は明示されている。これは話し手が自分の事を述べる場合には、聞き手にとって、主語がはっきりしているの、状況が限定され、主語を言い表わさなくとも、ambiguityが生じないため、このような構文が生じたものと思われる。この場合斜格の名詞または代名詞を伴っていたり、単純未来・予言・必然・意志などを表わす助動詞 shall や will を伴うことが多いのが特徴である。

Thys Erle said, “Raymounde, to you shal be comyng, …” 852

“Sir Gaffray” he said, “here this is no iape,
To god you commaunde, me will hens fast scape, …” 4115-16

Then hym said the gide, “do shall your entent, …” 4136

He ther answeyng, “be it witte or foly,
you will haue to loue, sin yifte me haue yif on,
I will noght desire non other guerdoñ.” 5556-58

Wherefor many sain in ther willd reuell,
“After appArens, shall haue A lord nouell.” 5193-94

This gide answered, “no charge of your bataill,
you gided haue to point, lenger will noght bide; 4124-25

被伝達文の主語が2人称の場合。

Raymounde Answerd, As not wold condissend,
“To-morne shall hir se, chere brother And frend;” 2748-49

On of thaim hym said, “se hym shall Anon,
And I beleue ye will it sore aby
iff he you se, for strong is of person; 4678-80

被伝達文の主語も伝達動詞の主語も共に省略されている場合。

In hys hert said with softe vois that day,
 “That yut Melusine hope and trust to haue;” 4030-31

15. 直接話法において、被伝達文中に挿入された節中の1人称主語は省略されうる。

“Raymounde, you councel, Astoned be noght,”
 Asaid thys lady, “for god shal you ayd; 449-500
 To hys barons said, “...;
 lenger may not liue here with you in lande,
 My noble Rewme Cipresse; now say you at end,
 Whom, to my power, haue warded and diffend...” 1464-68

16. 直接話法またはそれに準ずる文中において、besech や pray の前の1人称主語は省略されうる¹⁹⁾。ModE に比較して面白いことには thank には1例を除きすべて主語が付いている事である。

“Honourous lord,” he said, “besech you yif me,
 Ni to the Fontain of thursty gladnesse, lo! 674-675
 here in humbly wise pray thy excellence
 Off tham to haue mercy, grace, and pite, ... 6449-50
 Besech you and pray, cause me not it refuse;
 Cherefull fader myne, in you al the hold.” 2584-85
 Wherof thanke our lord the king of kinges,
 Which oure sones han put to such honour. 2698-99

主語が現われているものもかなりある。

My fair cosyn, I thanke you ful hertlye; 94
 Wherefor I you pray, lete hym dy with pine. 3668
 I the here besech with hole hert entire,
 Make us the ryght path go to our refuge, ... 6540-41

17. ModE の観点から見て、主格の関係代名詞の省略と見られるもので、通常 apo-koinou と言われるもの。この中には non-introduced relative clause と考えられるものもある⁽²⁰⁾。

An Ill was ther had full fair to deuise, ... 1570

ye haue made me do such A manere thyng
Torñ contrary will Again my person. 2837-38

In-to A serpent changed tho was she,
Of huge grettnesse and lenght was verily, ... 3867-68

Tho was the monte of whom we speke and say
Sette in Arrigon of trowth verily,
Which that is a thing knowen well be may. 4635-37

He that this boke made and gret parte gan do,
This knight died, in life had gret honour; 6147-48

18. 人称語尾によって、その主語が判断される場合に、代名詞主語は省略される。この現象は2人称単数の場合によく現われるものであるが⁽²¹⁾、この作品にあっては、それほど目立った数の用例は見当らなかった。それよりもむしろ1人称単数の場合の実例が多く、一般の傾向とは違った特徴を示すものとして、注目に値しよう。

Thys day am redy to your mariage. 837

For non othir cause comyn Am this houre, ... 4080

Off lusingen am naturally grow,
I wyll that my name to all men ben know." 1441-42

Gaffray with the gret toth named am awhere, ... 4245

By thy-selfen disceiued art in all,
Thou art fro hinesse into lownesse fall. 3632-33

No gentill knyght art but graunt my desire." 4242

Thy contre shalt se put in exile all, Distroed, robbed, peled, and more wurse, By ille sarisins;	2168-70
At mallers hath hys byding thys day,...	2705
This thing takith on ioyusly in breue, To peyters he cam in the morow-tyde;	600-601
Where-of the charge left to me hath, lo! With the cure and charge eneffed hath me.	2616-17

IV 結 論

以上述べて来たところが、この作品における代名詞主語の省略の実態であるが、極めて多岐にわたっていると見えよう。省略された代名詞主語を人称別にみると、

1人称	252
2人称	57
3人称	842

となり、3人称の代名詞主語の省略の多い事が目につくが、1人称・2人称の主語の省略もかなりの数にのぼっている事が注目されよう。

1人称主語の省略は主として、物語の語り手を表わす代名詞主語や直接話法の被伝達文中の代名詞主語の省略が目立っている。これらに関連して、物語の語り手がくり返し述べる文の中でその主語が省略されたり、beseech や pray の前で“*I*”が省略されたり、斜格の名詞または代名詞によって、その代名詞主語が判断されうるために、主語が省略される事例が多く見受けられよう。また、これは1人称に限った事ではないが、等位接続詞によって結ばれた等位節の2番目の節の主語、または並列構文における2番目以降の節の主語が省略される事例が多いようである。

2人称主語の省略としては、命令文を除けばこれと言った目立った特徴はなく、相対的に目立つものとして、人称語尾によって主語が判断されるため、その代名詞主語が省略されるものと、斜格の名詞または代名詞により、その主語が判断されうるために、その代名詞主語が省略されたものが目につく程度である。

3人称の代名詞主語の省略はさすがにその数も多く、以上述べて来た省略の行われる場合の全域にわたって、多くの実例が見い出される。

また省略された主語が何であるかを予想させる語の多くは先行する文の中に主語として現われていたり、さもなくば context によって、読者の心の中であらかじめ感知されていたりするけれども、省略されている主語を推測する手掛りが具体的に文面に現われる際に、普通は、省略されている主語の位置と思われる場所よりも前方に表示されるが、時として、極めてしばしばその位置よりも後方に表示されることは、一部の重文および復文において、最初の節に主語が省略され、2番目の節の方に主語が表わされている事実とあいまって、この作品における著しい文体的特徴であると言えよう。

更に全く主語の表わされていない文もあり、その主語は文脈から判断する以外どんな方法をもってしても推測できない場合もある。物語の話題が変わる部分ですら、主語が省略されている場合がある事や、主語のない文が相当長く続く場合がある事なども、この作品の一大特徴の一つであると思われる。

ここでは具体的には触れなかったけれども、*be* 動詞の省略や、定形動詞としての現在分詞の使用など（これらは代名詞主語の省略ほど顕著ではないが）は、普通の英語の表現から相当「逸脱」したものと言わざるを得ないであろう。これらの事実から判断すると、Skeat の言うごとく、訳者の native language は“corret type”の英語ではなかったのではないかと推測される。かと言って彼の母語はフランス語でもなかった⁽²²⁾。

彼は Melusine 伝説が極めてよく知れわたっていた Poitou 地方の英国人の家庭に生れたのかも知れない。ここではフランス語は話されてはいたが、それ

は literary type のものではなく、彼の英語に対する知識もまた、沢山の誤訳や文法的な誤りや metre の取り方があいまいである事などから判断して、不完全なものであったと推測されている。したがって彼はこの作品を英訳するに当って、日常語として彼自身が用いていた言語を使ったのではないだろうかと考えられる。かつここに現われている英語は当時この地方で語られていた口語の一形態を表わしているのではないだろうかとも考えられるが⁽²³⁾、これと同類の構文を持った作品が他に例のないことや、詩としては一応 rime royal の形式を取ってはいるものの、その accentuation など問題となる箇所も多く、中には奇抜な感じを受ける部分もあって、決して melodious なものではない⁽²⁴⁾ ことなどを考え合わせた場合に、やはりこの訳者のみに通用する文体的特徴として、このような広範囲にわたる代名詞主語の省略と言う現象をとらえなければならぬとの結論を下さざるを得ないであろう。

注

(1) Prologue. ll. 155-189 にこの間の事情が述べられている。Poem. ll. 5716~および ll. 6398~などにおいて、narrative は中止されている。

(2) ここに使用した text は

Skeat: *The Romans of Partenay or of Lusignen*

otherwise known as *The Tale of Melusine*,

Translated from the French of La Coudrette (before 1500 A. D.)

E. E. T. S. OS. No. 22, 1899.

である。

(3) Skeat: Introduction. p. 7

(4) 誤訳や文法上の誤りの一例。先ず単語の誤り。

Without *traying*, therfor, gan he do, 49

traying は *tarying* の誤り。

To herd fast tho cam in conclusion ;

his *opinion* right noight went in-ded,

Well felt the strokes on the chinesse bred. 5645-47

opinion は *loppine* の誤り。 *loppine* は to cut into pieces の意味。

metre の上での誤り。

For of it wold merily reioy : 755

Cf. Car vraiment *Je le voudroie.*

syntax の面での誤り.

Towards luxemborough thys said duk went, 2018

Cf. En luxembourg, vers le duc, va.

“Sir Anthony,” he sayd... 2006

Cf. Anthonie lui dit... (なお, text はフランス語の版により補正してある)
story の面での誤り.

1.251. 以下で Raymound が Erl を殺すのであるが, 訳者は boar がその牙で彼を突きさしたとしているが, フランス語の version では boar の背中で Raymound の剣がすべって, Erl に突きささった事になっている. さもなくば,

1.269. 以下のような Raymound の lamentation は全く無意味と言わざるを得ないだろう. (Skeat の introduction および notes を参照)

- (5) Kellner: *Historical Outlines of English Syntax*, Kenkyusha, 1956. p. 163.
———: *Caxton's Blanchardyn and Eglantine*, E.E.T.S. ES. No. 58, 1896.
p. xxxii.
- (6) Mustanoja: *A Middle English Syntax*, Helsinki, Société Néophilologique, 1960. pp. 138-139
- (7) Sweet: *A New English Grammar*, Oxford University Press 1952. §111. §534.
- (8) 予備の it を予想する非人称主語の it と命令文における 2 人称主語の省略との場合を除く.
- (9) Kellner は *Historical Outlines* の中で 7 項目 (§268-§279), *Blanchardyn* では 4 項目 (pp. xxxii-xxxiv) を挙げている. Mustanoja は *A Middle English Syntax* の中で 8 項目 (pp. 138-142) を挙げて分析している. これらの 3 つの論文中には一致する項目も多々あるが, 異なった項目もかなり目につく.
- (10) ここで省略と言う言葉を用いているが, 以上述べて来た事から言えば, 主語がくり返し表示されないとか, 主語の未表示と云った方がよいかも知れない. Mustanoja は Non-expression of personal pronoun, Kellner は personal pronoun omitted とする用語を用いている.
- (11) ME の text において, 文の範囲をいかに決めるかについては一概に言いきれない面がある. 特にこの作品のように punctuation にかかなりの問題があり, フランス語の text によって編者の方で修正した部分がかかなりあっては, 果してこれが当時の姿であるか否かについての疑問が残る. しかし彼のほどこした emenda-

tion を一応全面的に正しいと信じて、以下の考察を進めて行くことにする。

また文の定義についても多くの問題があるが、実用的な定義として、終止音調休止型を象徴するための句読点を持った語群と言った外形的要素を基準として、書かれた言語材料の中から、文を識別して行く手掛りとして。 C. C. Fries: *The Structure of English*, Longmans, 1965. What Is a Sentence? pp. 9-28 etc.

- (12) この作品にあっては、詩の各行の最初の文字がすべて大文字で始まっているとは限らない。行の途中にある単語、更にはある単語の中の一文字が大文字であることもありうる。また固有名詞も常に大文字で始まっているとは限らない。
- (13) このような文において主語をいかに判断するかが問題となるが、ここに集められた文においては項目 I に該当するもののほか、
- i 斜格にて現われる名詞または代名詞がその手掛りとなる。
 - ii 直接話法の被伝達文中の主語 “I” の省略と見られるもの。
 - iii 語り手の “I” の省略と見られるもの。
 - iv 接続詞 and や but によって結合された後の方の主節中で主語が省略されるもの。
 - v 並列構文とみなされるもの。
- など、以下に述べてあるどれか一つの項目に該当する手掛りによって解決できるものである。
- (14) 主節の主語をいかにして判断するかが、やはり問題となるが、注 (13) と同じような手掛りによって解決されうる。
- (15) Kellner: §279. Curme: *Syntax*, D. C. Heath & Co. New York, 1931. 5. d. Jespersen: *A Modern English Grammar*, III. 9.2.7.
- (16) Jespersen: *M. E. G.*, III. 9.5.1. Mustanoja: p. 202.
- (17) Curme: 23. II. Jespersen: 9.1.-9.7.
- 同様な事が but や than についても言いうる。
- Ther had no sarisin but full sore pam drad. 5326
Cf. Sarrasin neust qui le craingne.
- なお than の用例は本作品中に見受けない。
- (18) このような部分を仮に導入部分と呼ぶなら、この導入部分における主語の現われ方と省略の状況は次の通り。
- i 語り手の “I” も次の文の話題の中心人物を表わす主語も省略されている。
..... 9例
 - ii 語り手の “I” の方がのみが省略 13例

- iii 次の文の話題の中心人物を表わす主語の方が省略されている。…………… 2 例
- iv 両方共に主語が省略されている。…………… 5 例
- (19) これは *prosiopesis* として解釈されるかも知れない。しかし ME における主語の省略は、*prosiopesis* とは別のものであろう。
Jespersen: *M. E. G.*, III. 11.8.6.1.
- (20) Kellner: §274. Mustanoja: pp. 143-144 & pp. 203-205.
Kellner は単に関係詞の省略としてこれを説明しているが、Mustanoja はこの種の省略を人称代名詞の省略による対等節であると解釈してはいるが、その内のいくつかは関係代名詞の省略による *non-introduced relative clause* と考えられるとしている。また、Curme: 23. II. 10.
- (21) Franz: *Die Sprache Shakespeares in Vers und Prosa*, Max Niemeyer Verlag, Halle, 1939. §306.
Mustanoja: p. 139 f.
- (22) *Partenay* Prologue. ll. 8-14.
- (23) *Partenay* Poem. ll. 6571-73, ll. 6562-63 etc.
- (24) Skeat: Introduction. pp. 9-10.

最後に、本稿を草するに当り多大の御指導と御助言を賜った名古屋大学教授佐藤一夫先生と岐阜大学助教授中尾祐治先生に心から感謝の意を表すものである。